

二人三番叟

ににんさんばそう
それ豊秋津洲の大日本、とよあきつす 国常立の尊くにとこたちより、みこと 天津神七代の後、あまつかみななよ 地神の始めちじん天照あまてらす大神。おおんがみ

式三番のその謂われ、おさく／＼申すも恐れあり

「おおさへく、ほふ悦びありや、悦びありやわがこの所よりも、ほかへは
やらじとぞ思ふ」

物の音につれて立ち舞ふおみごろも小忌衣、千歳は近江なる白髭の御神なり。せんざい 黒き尉じようは住
吉の大神、おんがみ 鼓は浪のどうど打つ音は高天が原なれや、岩戸に向ふ神かぐら、ほ
そろぐせりと吹く笛もひいやひしぎの音色まで春は霞の立姿。

「そなたこそ。」

初日は諸願満足円満、二日の日はまた二つ柱、うづめ 宇津女の神子みこが

一ト二タ三四五ツ六ユ七八九の十、ひ ふ み よい む ななやここ たり 百千万の舞の袖ももちよろず

五月のさ女房が笠の端はをつらねて、早苗追つ取り打ち上げて諷ふた。

「千町」せんちやう

「万町」

「億万町」

田をばぞんぶりぞ、田をばぞんぶりぞ、ぞんぶりく／＼ぞんぶりぞ。

御田を植えるならば、笠買うて着せうぞ。

笠買うてたもるならば、なほも田を植えうよ。

三日は福德寿福円満、子徳人の子宝、車座に並べた。たつまつ、いるまつ、
かいつく、ひつつく

火打袋ぶらりと付けて候ふぞ。

これ式三の故実にて三日、これを舞ふとかや。

柳は緑花は紅数々や

浜の真砂は尽きるとも、尽きせぬ和歌ぞ敷島の神の教への国津民

治まる御代こそ目出たけれ。